

9/21(土) まいど！ 倫理告白。 彼岸 お墓参りをする今日の日に、令和元号が初めて来る。 幸せ運びアド一鳥
倫理の学びの中でも自然とそのままで今週の倫理 1152号 2019.9.21 ▷ 9.27

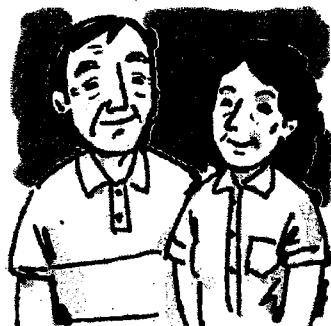
親祖先、縁者を尊ぶ」とは、自分自身を尊ぶ」とにつながります。感謝の念を新たにすると、心が澄んで美しくなるからです。心の交流を重ねる」とで、家庭が明るく変容した、N氏の少年時代の回憶話を紹介します。

N氏の家に仏壇が置かれるようになったのは、氏が十歳の夏を過ぎた頃でした。

それまで、借家の床の間には何も置かれていませんでした。仏壇が床の間に設置されて以来、N氏の父親が毎晩、ご飯とお茶を供えることが日課となりました。その後、父は正座し両手を合わせ、何かを報告するような勤行(ごんぎょう)を始めたのです。きっかけは、父親が高血圧症と診断され、生活改善を余儀なくされたからでした。

当時は、両親とN氏ら兄弟四人の六人家族でした。サラリーマンの父親の収入では、厳しい生活環境にありました。病に伏すわけにもいかなかつた父親は奮闘し、日々のウォーキングから始めて、ランニングができるまでになりました。腹筋運動も行ない、体調を整える努力を毎日続けたのです。〈他に何かを変えなくてはならない〉と思つていたちょうどその時、『ここに倫理がある』という書籍を手に取つたのです。それは、倫理研究所発行の月刊誌『新世』の購読者であつた妻が持つていたものでした。

その中に、亡き肉親との心の交流を忘れず、墓参りをきちんと行なう人の仕事や、家庭がうまくいっていると示され、その理由は次のように記されていました。



9月のテーマ | 親祖先への感謝

墓を大事にする心

墓を大事にするということは、親祖先を大切にすることと、同じことであるからであります。親祖先を大切にし、そのおかげを思うことは、自分自身の命を感謝し、命をより充実させることになります。(『ここに倫理がある』丸山竹秋著)

自分の肉体と精神は、親祖先の肉体精神、まさに生命が積み重なつたものなのです。だから墓を大切にし、墓参をすることは、わが心を引き締め、自分の命の鞆帶に油をさすような働きになるというのです。

また、遠方に墓がある場合、実際には、年に一度の墓参りもなかなか難しい」とにも触れていました。そうした場合には、親類か、誰か然るべき人に墓の管理を頼み、その人に玉串料(たまぐりよう)や線香代、花代をこづけるのは、大変ゆかしいことであると書かれてあつたのです。

N氏の父は、もともと信心深い人でした。それでも、この文章を目にするとまでは、日々の仕事と子育てに忙殺され、亡き両親との心の対話を重ねるなど思いもしなかつたのです。その上、転勤の多い仕事で、関東に勤務していため、故郷の関西には容易に帰れませんでした。そこで、毎晩の勤行と毎月の線香代の送付を始めたのでした。

それから家の中が次第に明るくなつていく過程をN氏は、直接的に経験することになるのです。五年後、父は親会社への栄転が決まり、さらには責任ある部門を任され、家庭も安定していくのでした。

N氏は今、父の軌跡をそのままに歩んでいます。